ハインリヒ・マンと国内亡命文学

横塚祥隆

ハインリヒ・マンと国内亡命文学との関係を考える際に考慮に入れなければならない問題はどのようなことだろうか。

まず第一に考察すべきなのは、ハインリヒ・マンがどの程度まで国内の文学の事情に通じていたのかということであり、次いで逆に国内に留まったものたちはかれに対してどのような感想をもっていたのかを探ることであろう。

第二にはマンが国内に留まったものたち、あるいは国内の文学をどのように考えていたかであろう。その際には、当然のこととしてまずマンの著作を探ること、またマンの周辺にいたものたちの発言の中に手掛かりとなるものがあるかどうか調査することが必要になる。

第三にはかれが亡命地で書いたエッセイや作品にかれの文学的抵抗の特徴を読み取ることが出来るかどうか、出来るとしたらどのようなものであるかを考察すること。

そして最後に国内亡命文学に数えられる作品との比較が必要になろう。そのことによってマンと国内亡命文学との違いや逆に相似点が浮かび上がってくるのではないかと思われる。

手続きとしては以上のようなことが、さしあたりは考えられるのだが、目下の筆者は問題をそれほど整理しているわけではなく、行きつ戻りつ、堂々巡りの果てに何ひとつ明確になしえない予感があるのを否定しがたい。

（一）

一九三三年以後ドイツを追われ、あるいはドイツから逃れたものたち、とくに亡命した作家たちが、ドイツに残ったものたち、すなわち国内亡命の作家たちを、一般にあるいはそれぞれに、どのように考え、見なしていたかという考証的問題は、ギーゼラ・ベリルントの労作「『国内亡命』という概念についての若干の考察」[1]をはじめとする論考に譲って、ここでは国内外の心情を端的に表していると思われる証言を紹介するにとどめる。

亡命地で議論が闘わされる折りに、いつも問題になったのは、いったいいつになったらドイツの労働者たちは革命を起こすのか、ということであった。他方国内での議論の際には、反ナチス闘争への国外からの援助は来ないのか、という疑問が繰り返し出された。私は国外にあっては、何度もこう言わざるをえなかった、君達はいったい何を期待しているのか、まったく不可能なのだ、労働者による革命とか社会主義革命などが、この軍隊と警察の機構が完備されている国でありうるなんてことは、と。また国内にいた時には、戦争にでもならなければ、国外からの援助など期待出来やしないのだ、と言わざるをえなかった。戦争を望むことが許されるだろうか。おそらく戦争になるだろう。そうすれば――と我々は考えた――ヒトラーを排除する機会も来るだろう。[2]」

この言葉はドイツ国内にとどまったものたちと亡命したものたちとの間に、相互の期待と疑念があったことを如実に物語っている。そうした疑念は常に彼らに付きまとっていたであろうことをわれわれは念頭にお

いておく必要がある。たがいの間になんらかの経路を通じて情報の交換が可能であったとしても（むしろ情報を手にし得たもののほうが少なかったと考える方が自然ではなかろうか）、そしてたがいへの期待が増大すればするほど、むしろその疑念は表面から内心へと沈潜し、凝縮されて行ったのではないか。その中で、ハインリヒ・マンは、あたかもそうした疑念がないかのように、あるいはその疑念を振り払おうとするかのように、国内への語りかけ、呼びかけを繰り返した。

そうした「闘う国内」への期待を抱いていた点において、マンは他の亡命者と軌を一にしていた。ただマンを他と隔てていたのは、ドイツにおいてヒトラー政権が地歩を固めるにつれて、他の亡命者たちは亡命初期における「国内」への期待を失って行った、あるいは修正せざるを得なかったのに対して、マンにおいては危機が深まるにつれてむしろその期待は強化され、増大して行ったように思われることである。その時マンを支えていたのは、おそらくは彼を特徴づけるとも言えるだろう、人間の教育（あるいは学習）の可能性への確信と、歴史の進歩への期待及び倫理的人間への信頼であった。

これらの確信はもちろんマンのなかで個別に存在しているのではなく、関数のように相互に深く関りあっているのだが、かれの反ファシズム文学についての広い視野に立った見解、あるいは偏狭な教条主義的立場とは距離を保った寛容な態度――とは言え何もかも無際限に受容するというものではない、自由な思考を抑圧しようとするもの、それに与するものを峻拒する厳しい彼自身の倫理的姿勢が背後にある――も、これらの確信に支えられているのである。またそれらの確信はかれの労働者をはじめとするドイツ国民への期待とも決して無縁ではなく、むしろそれらを支えていたのである。

マンがフランス亡命中に書いた多くの政治的文書、反ファシズム・反ヒトラー闘争のための文書が、様々な経路によってドイツ国内にひそかに持ち込まれていたことについては、いろいろな所で指摘されている。[3] ヤン・ペーターゼンのように国外からの声に励まされたことや『Braunbuch』のことまで語っている例もある。[4] しかしそうしたことはむしろ珍しく、さらに国内残留者たちの日記やメモなどに、国外からどのようなものを受け取り、それがどんな効果を及ぼしたかについての記述を見出すことは、ほとんど期待できないのではなかろうか。

またマンがドイツ国内からその情勢についての情報を得ていたことはたしかである。[5] しかしそれらがどのような経路で彼にもたされたのかについては、かれにもまたかれの周囲にいたものたちにもほとんど発言が見られない。

（二）

しかしマンが国内に残ったものたちに思いを馳せていたことを示す記録・文書は少なくない。その中で、まず第一に上げられるのは、彼が一九三四年九月にモスクワで開催されたソ連作家会議に当てたメッセージ An den Kongress der Sowjetschriftsteller である。[6]

彼はここで「反ファシズム文学は必ずしも意図的に反ファシズム的である必要はなく、良心の自由を堅持することによって、すでに反ファシズム的である」とし、さらにドイツ国内にとどまったものたちの中にも、

亡命文学に数えられるものがいるとしている。こうした見方は決してマンに限られたものではない。

しかしまたマンのような反ファシズム文学、あるいは国内亡命についての寛容な見解と対立する見解がないわけではない。マン自身も上述のメッセージの中でドイツ国内にあるのは「不細工な代物」でしかないことを明言しているが、それはむしろそうしたものの存在を認めることによって、それとは異質のものを強調し、もう一つのドイツの存在をアピールしようという意図のもとに行われている。マンほど寛容になれずに、時にドイツ国内の文学を全面否定するような意見を表明する亡命作家がないわけではなかったのは、[7] 国内に向かってより、彼らが身を置いていた亡命国の読者に、やはり反ファシズム亡命文学の独自性、それがドイツ文学を代表する唯一つの文学であることを主張し、際立たせるためであっただろう。その点においてマンの発言は、その対象をドイツ国外に限定せずに国内に届くであろうことを十分に意識してのものであって、きわめて戦略的なものであると言えるだろう。[8]

またかれには次のような言葉もある、「それ（亡命…筆者注）は沈黙している同胞の声である。全世界に対する彼らの声にならなければならない」[9] というマンの言葉の重点が、亡命したものの担うべき使命を明確にすることに置かれているのはもちろんであるが、それによって同時に彼がいかに国内に留まったものたちとの結合を重視しているかが窺われる。国内にいるものたちのすべてが、好んでそうしているわけではなく、ましてやナチであるわけでもないのだから、あるいは自らの意志によってそうしているにせよ、ナチを選んだがためではなく、国民を、文学者の場合であれば、その読者を選んだがためであってみれば、[10] 亡命したものたちが、自分たちのみが反ナチであり、真のドイツであると主張するとすれば、当然国内にいるものたち

をナチとして敵にまわさなければならない。そうではなくて、マンのようにあくまでも国内残留者との連帯のもとに反ナチの統一的闘いを遂行しようとすれば、国内に残ったものたちとの連帯があってはじめて、亡命者は自分が根無草ではなく、ナチと闘うドイツを代表するもの、「もう一つのドイツ」であり、最良のドイツであることを主張しうるのである。

もちろん筆者は例えば、ハインリヒ・マンやリカルダ・フーフ、あるいはその他の作家・詩人たちが文芸アカデミーから排除され、脱会した後に、ナチに推されてアカデミー会員になった作家たちの行動[11]を、ハインリヒ・マンが「やむをえなかったこと」だと考えていただろう、などと言う気はない。ただ彼には国内に残ったものたちに対する厚い同情と深い理解があっただろうと想像するだけである。彼の国内亡命作家や労働者をはじめとする国民一般との連帯感には、そうした同情や理解が裏打ちされていた。

沈黙させられ、作品の展示も暴力的に断念させられたエルンスト・バルラハを語るマンの口調からは、この高貴さと素朴さを兼ね備えた作品をものした作家・彫刻家に対する敬意と愛情を感じとることができよう。[12]その文章はバルラハをあるいは彼の運命を語るために草されたものではないかも知れない。そのような知識人を「言葉と形象による誠実な労働者を庶民から切り離そうとしている」ものたちが真に狙っているのは、単に知識人の民衆からの隔離ではなく、バルラハの例に見られるように、道徳的な抹殺であり、それによって同時に民衆をも腐敗させることであるのを暴こうとしたものであろう。「エルンスト・バルラハにその気がありさえすれば、誰が破壊し、誰が打ち壊しているのかを、自分の体験から人々に解き明かすこともできただろう」という一節には、マンの厳しさ、まさに「自分の体験から」人々にナチの正体を説き明かしてい

るマンの非妥協的な一面を窺うことができる。しかしそれ故にこそ彼のバルラハに寄せる同情と理解は一層真情溢れるものになっているのである。それがマンの発言を暖かみのあるものにしているし、単に戦術的・戦略的なものに終わらせていない。そうしてその同情や理解は亡命した彼に示されたフランスの友人たちの彼に対する同情や理解、協力・援助を通して学んだものだったはずである。同時に彼とバルラハをはじめとする国内に残ったものたちとの間の思想的ではなく、倫理的同質性によるものだったのではないか。

マンが社会主義者になったかどうかはさしあたり問わない[13]として、彼が亡命によって様々なことを学んだのはたしかである。ことに彼が反ヒトラー諸勢力の糾合が急務であると考えていたことは、彼が例の選挙に際して統一を呼び掛けた文書に署名していたことからも十分に推測されるのであるが、亡命によってその彼の考えは強化され、確信となった。ナチの政権掌握は彼に亡命という試練を与え、彼はそれから学んだ。そのマンは亡命した政党や国内に残った活動家や一般国民に自分が学んだと同じように試練としての状況から学ぶことを要求する。ドイツ国民はいまや試練に学ぶべきであり、実際に学びつつあるというのが彼の期待をこめた確信であった。だからこそマンは労働者、農民、学生などに「学習」を説くのである。

彼が反ファシズム闘争への立ち上がりを期待しているのは、大学教授になりうるまでに学習した農婦である[14]。良心や魂のことなど歯牙にもかけないものが権力をほしいままにしてることを悟った信仰者たちである[15]。スペインにおいて自分の息子が隣人の息子と殺し合いをしていることを知った母親たちである[16]。知性を貶めているのが誰であるかに思い至った学生たちであり[17]、賃金を抑え、労働強化を強いているのが何であるかを体験した労働者[18]、作物の自由販売を禁止され、家族を養うことすらできず、いまやそうした状況を告発すべ

く書くことを始めた農民たちである。

しかしそれらの中でマンが作家や知識人を一般国民より高貴な存在と考えていたことは明らかである。[19] マンはこれまですでに自分を「考える・書く労働者」であると思って来たと言っている。[20] だからといって彼が語りかけている労働者たちと同列に位置しているわけではない。彼がそうしたいわば精神の労働者、敢えて限定して言えば、文学者を一般大衆や労働者より高貴な存在として、つまり彼らから尊敬されるに値するものとして考えていたことも明らかである。もってまわった言い方をすれば、彼が労働者あるいは国民を共に語るに足る、あるいは語りかけるに足るものとして見るのは、彼らが文学者を尊敬することを知っていると彼が思う時である。[21] つまり彼が語りかけるのは第三帝国が必要としているような「考えることのない大衆」ではなく、あの大学教授になった農婦のように常に向上を心がける「少数者」なのである。あるいはそうした少数者になろうとしているもの、マンがそれになりうると期待している予備軍である。その際マン自身は、先にも言ったようにもとより「大衆」ではなく、いわば「選ばれた少数者」の側にある。しかし「少数者」が「多数者」にならない限り、ヒトラー打倒は不可能なのである。マンは当然それをわきまえていたはずで、労働者に代表されるような国民一般が自分たちに近付いて来るように呼び掛けているのである。マンもまた知識人、文学者に国民の先に立ち、それを導くものとしての役割を見ていたのである。[22]

マンはたしかに知識人の労働者化を説く、[23] だが労働者に接近しなければならない知識人の中に、彼自身は含まれていない。彼自身はすでにして自己に「労働者」と名乗ることを許しているからである。したがって彼が知識人の労働者への接近、労働者に成りきることの必要性を説くにせよ、それは労働者の知識人化を説

くためのいわば前説に過ぎない。[24]

ヴェルナー・ヘルデンはマンが亡命期を通じて労働者階級へ接近していったことを論じているが、マン自身はその知識人としての本質を決して変革することはなかった。彼は労働者と知識人の共同作業を説きながらも、その役割を截然と分けていた。ヒトラー打倒のための戦いの、あるいは革命の担い手はまず第一に労働者であるとしながらも、その革命を指導するのは知識人であったのである。[25]

(三)

マンが知識人、あるいは精神の労働者の優位・指導性に重点を置くのは、革命に限ったことではない。彼のナチズム観、ヒトラー観においても精神ないしは精神的な要素が核をなしている。ヒトラー出現の一要素としてドイツが既に内面的生活を喪失していたことを彼は指摘しているが、[26]更に彼はナチズムを野蛮と規定する。そしてその野蛮とは「魂の喪失、非人間性、没精神的飼育、荒んだ所業」であるという。[27]彼が人民戦線の結成を目指し、殊にドイツ国内の労働者に団結を呼び掛けるようになる以前には、ほとんどもっぱらと言ってもいいほど、彼はナチズムとヒトラー一派の没倫理、非精神性を問題としている。反ヒトラー闘争における彼のこうした姿勢は、彼がナチズムを社会的・経済的側面から眺めるようになっても変わることはなかったし、また将来の国民国家における「経済の正常化」あるいは「国有化」を言うようになっても、[28]その際の精神の指導性、その優位、あるいはまた倫理的・道徳的成熟の優先を放棄することはなかった。コミュ

ニズムは何よりもまず倫理的問題であり、人民戦線の本質は人道的であるとするハインリヒ・マンの考えは決して揺らぐことはなかった。

そうした彼の考えは『アンリ四世』において強められこそすれ、弱められたり、変革されたりすることはなかった。彼はアンリを何よりもまず、倫理的人間として描いたのである。

大作歴史小説『アンリ四世』は、自然児アンリ・ド・ナヴァールがフランス国内の宗教戦争に終止符を打ち、平和を希求し、建設しようとする君主にまで成長する過程を描いたいわば教養小説でもあるが、筆者はマンのこの作品についての「模範」あるいは「比喩」という言葉に、いささかこだわってみたい。

「われわれはある歴史的形象をたえず自分が生きている時代にも関連付けようとする。……歴史的形象はわれわれの手にかかれば、意図のいかんにかかわらず、われわれの経験が反映された模範となる」[29]、あるいはまた「私は、この戦争が始まるちょうど一二ケ月前に、一つのドキュメントを仕上げた、アンリ四世――寛容の力である。それは輝かしい歴史でも快い寓話でもない。一つの真正な比喩にすぎない」[30]というハインリヒ・マンの陳述から窺われるのは、アンリを、そしてアンリによって実現された（あるいは実現されようとしていた）統一国家としてのフランスをヒトラーと第三帝国の反対像として提示しようという意図である。[31]

『アンリ四世の完成』の最終章でアンリはスペインのフェリペ二世との抗争に決着を付けるべく戦争の準備にとりかかる。だがその戦争とはアンリの権力欲によってなされるのではなく、ヨーロッパに最終的に恒久平和をもたらすものとして考えられている。ここにおいて既にアンリによる平和と正義のための戦争と、予想されるヒトラーによる開戦との対比を著者は意図したであろうし、読者もまたそれを読み取ったであろ

う。

しかしまたこのアンリによる戦争とその準備には、ヒトラー・第三帝国に対して断固たる態度を見せようともしない強大国に対する警告が含まれてもいよう。そしてまたマンが「ドイツの解放戦争」の始まりと考えたスペインでの戦争[32]と、「必要とあらば武器を取らねばならない」とドイツの労働者に呼び掛けた抵抗と革命のための闘いの本質を暗示している。

アンリの生涯を導いたのは「敬虔な行動とはなんだろう」[33]という疑問であった。彼がこの疑問を初めて口にしたのは『青春』の中の「海辺での対話」と題される一節でなされるモラリスト、モンテーニュとの会話の終わり近くである。モンテーニュとアンリとの間には、後者が前者に顧問官就任を要請したことがあるくらいにかなりな信頼関係があって、ひょっとするとマンも「旧教徒兼新教徒たるモンテーニュと新教徒兼旧教徒たるアンリ四世との間には、一切の宗教的対立を越えた黙契理解があったかも知れない」[34]と思っていたかも知れない。もちろんこの海辺での二人の対話はマンが仮構したものに過ぎないが、歴史的人物としてのアンリをマンがどのように仮構のアンリに作り上げたかを比較検討するのは小論の主要関心事ではない。[35]

アンリ四世は一五七二年カトリックへ、七六年プロテスタントへ、九三年最終的にカトリックへ（破門を解かれたのは九五年）と改宗を繰り返した。それには政治的なあるいは宗教的な背景があっただろう。しかしまた、たとえば、マンが『完成』においてアンリとカトリック修道女との情事を、アンリの側近であるビロンに「宗旨がえ」[36]と呼ばせているように、アンリにとって改宗も多情な彼の情事のようなものであったかも知れない。あるいはそうした数度の改宗を含むアンリの揺れ動く言動については、宗教戦争の現実を目に

することによって、「アンリは対立する二つの教会をともに手玉にとる方法を期せずして教えられた」[37]ということもできるだろうし、そうしたタクティークをアンリが身につけていただろうことも想像に難くない。

だがもし歴史小説が、歴史そのままを描くのではなく、いわば時代精神を描くことを本領とするのなら、この場面によってマンは宗教戦争時代の精神を、あるいは敢えて言えば、その時代を越えるべき精神の萌芽を示唆したのではなかったか。そうした意味においてもアンリ四世はマンにとって「模範」たりえたのである。また「……自分の生命を守りうるものは自分だけという時、若いアンリが新教を捨てると宣言しても、あまりこれを咎めることはできないかもしれません」[38]というのは、まさにそうであって、当時の新教徒には盟主と仰ぐべき存在が是非とも必要であったという、いわば政治的理由をぬきにしても、彼らがアンリを再び新教徒として迎え入れた心情には、如上のような暗黙の了解があったにちがいない。そしてそのことは、マンの国内亡命に対する見解と一脈相通じているように思われる。

若いアンリが口にした先の疑問は「宗教戦争はその根を信仰に持ってはいないし、人間を敬虔にすることもない。（略）民衆も王国も他国の餌食にされてしまうのだ」[39]、あるいは「行動を口にするものは混乱のことを言っているのです」[40]というモンテーニュの言葉によって導き出されたものである。既に国土の荒廃は「不寛容が外に表れた結果」[41]であるという考えに傾いていたアンリにとって、かつまた党派争いを演じているよりフランスを統一してスペインに当たり、国土を荒廃から救い、平和を実現する使命を感じていたアンリにとって、これらのモンテーニュの言葉は直ちに彼自身のとるべき態度の指針を与えることになったのである。つまりアンリはカトリックとユグノーの党派争いを単なる世俗的な権力闘争としてではなく、真に信仰の問

題として考え、その獲得された（あるいは獲得されるべき）真正の信仰、すなわち寛容と敬虔に支えられた義なる行動を求めたのである。

アンリのこうした宗教的、倫理的信条は彼の一見放埒な態度、振る舞いにもかかわらず、彼の内面の奥底に常に潜んでいて、事に臨んで外に表れて来る。「一軍全体が跪いている。攻撃するかわりにそれは祈っている」[42]とモンテーニュが描き出したあるべきアンリの軍勢の姿は、やがてパリ攻略を目指してマイエンヌのカトリック同盟軍と対峙するアンリと彼の軍勢の姿[43]に実現されることになる。

しかしもちろんアンリを信仰一途の人物と見ることはできない。彼はかつて聖ベルナールが説いたような中世のキリスト教的騎士の理想像とは無縁であろう。アンリは決してキリスト教と教会――カトリックであれプロテスタントであれ――のための戦士でもなく守護者でもない。敬虔とか義とかを――もちろんそれらはキリスト教と無縁であるはずはないが――おのが行動の原理にしていたにせよ、教条的思惟や規範に束縛されることはなかった。

アンリが対立する二つの教会の間にあって繰り返した改宗は、もちろん単に「宗教的」意味のものではなかった。「教会」という組織がすでに単純に「宗教的」なものではなく、経済的にも政治的にも世俗権力としての絶大な影響力を行使し得たのであってみれば、アンリが結合させるべく直面していたのは、二つの世俗権力でもあった。小国ナヴァールの王子に生まれた彼がパリの宮廷で、あるいは戦野のテントで身に付けたのは、そうした対立する権力の間でいかに自己の安全を図り、自己の意図の実現を図るかという処世術であったかもしれない。そうであったとすれば、かれの『完成』というハインリヒ・マンがつけたタイトルは

きわめて暗示に富んでいる。つまりアンリも完成に向かって学習の道をたどったのである。マンの「模範」あるいは「比喩」とはしたがってアンチ・ヒトラーまたは反第三帝国を意味するだけではないと思われる。学ぶものとしてのアンリ自身が反ファシズムの闘いに立ち上がるべきものとしてのドイツ国民の「模範」として造形されたのである。

（四）

そのようにナチによる支配を学習のための試練としてとらえる点において、マンは国内に残った殊にキリスト教信仰の立場からナチを批判した作家たちと軌を一つにしている。(44)

キリスト教的作家たちが試練を口にする時には、その前提に現在の状態を招来したものとしての人間の罪がある。その罪を自覚するための機会としてのナチという試練がある。キリスト教徒の作家にとっては『哀れなハインリヒ』におけるハインリヒの病気とヒトラー政権とは本質的には同じなのである。ハインリヒにとって病気という災いは、彼の罪を象徴すると同時に、彼にその罪の自覚を促す試練であって、それを経ることによって彼は救いへの道を見出した。彼にとって罪の時は同時に救いの時であった。それはナチ時代のキリスト教的作家にとっても変わらない。

「今こそ救いの隠されている時／人間の傲慢が市場に壽いでいる時／その時聖堂には祈るものたちが顔を覆っている」(45)といわれ、あるいは「罪と恩寵は離れることがない」とうたわれ、「人間の業と都市とが茨の

繁みのように燃える時／近くにある、あなたの顔とあなたの打ち砕く言葉が」[46]とうたわれるように、キリスト教的作家たちはナチという罪の時、試練の時に、裁きの時、救いへの時を重ねて見ていたのである。

キリスト教徒あるいはキリスト教的作家にとって現実のヒトラー政権の打倒はさしあたり問題ではない。ヒトラーを「アンチクリスト」[47]と呼び、裁かれるべきものと断定するにしても、彼らがなすべきことは、どちらの側につくかという選択であって、最終的な審判を下すのは人の業ではない。したがって彼らはドイツ国民に向かって、今こそその選択の時であることを説くのであって、ヒトラー打倒を直接的に呼び掛けることはない。

しかしそれは一段高い所から一般信徒やドイツ国民を、そして彼らが直面している現実の諸問題を、傍観者的に冷やかに眺め下ろしていることを意味しない。[48]キリスト教徒の作家には常に、ヒトラー政権下と限らず、いつの時代にあっても、リカルダ・フーフの言うように神から与えられた声によって、[49]掟を離れた民を導くという務めが委ねられている。彼らにとっては覚醒したものとして現実を受け止め、その現実の背後にあるものを透視することによって、先覚者的に、預言者的に民に向かって働きかける務めが先行する。

ハインリヒ・マンにおいては、キリスト教的作家が指摘するような罪の意識は無論存在しない。しかしドイツ国民の責罪を認めないわけではない。[50]むしろそれを鋭く、厳しく指摘している。マンが言うように「内面的生活を喪失した」ことによって、ドイツはすでに久しい以前からヒトラーを準備していたとすれば、ナチ政権の実現を招来したその責任にドイツは今や気付くべきなのであり、その機会を他ならぬその政権自体が提供しているのである。[51]今やドイツは真の民主国家への歩みを始めるか否かの岐路に立たされている、ナ

チという現実はその試練の場であり、「学校」なのである。マンもまた試練の時は解放の時と考えていたのである。とは言え試練を通して学びとられるべきものが両者においてまったく一致していたわけではない。

マンの場合は、当然のことながら、直面する悪を打倒するのは、その下に苦しむ民衆自身である。そのためには「必要とあらば、武器を執らねばならない」と説く。[52] スペインで国際旅団に参加している作家たちは、まさにドイツ国民に先立って圧政に対して立ち上がっているのである。そしてドイツにおいてヒトラー打倒のための闘いの「断固たる民兵は統一された労働者たち」[53]である。

だがキリスト教徒の作家たちはドイツ国民に向かって武器を執れとは言わない。勿論彼らとてもヒトラー＝悪を打倒するための力の行使を場合によっては必ずしも否定していなかったことは、例えば七月二〇日事件に対する見解に見てとれる。[54] しかしその場合にも問題になっているのは、力の行使を単純に肯定することではなくて、より大なる悪を倒すためには、自らの魂の救いをも賭するような行為の持つ宗教的犠牲的意味である。

たしかにヒトラー打倒のための直接行動に関しては、国内に残ったキリスト教的作家たちとマンとには違いがある。だがマンが武器を執れと言う時でも、その武器の行使には良心の裏付けが不可欠のこととされ、そこには犠牲的行為としての闘いという意味もあったはずである。彼が労働者エドガー・アンドレやルードルフ・クラウスを、そして作家オシエツキを、あるいはまた政治家テールマンを「英雄」と呼ぶ時、称揚されているのは、なによりもまず彼らの行為が良心に基づく、ドイツ国民のための勇敢で誠実な犠牲を意味しているからである。[55]

他のものたちのために働くこと、その点において彼らはまた、マンの目には、アンリの後継者であるのだ。アンリこそは「他のものたちのために働こうとした」[56]真に偉大な人物だったからである。彼らもまたマンにとっては、すでにしてドイツ国民の「模範」たりうる人物になっていたのだ。しかも彼らはアンリと同じく自己の道を進むことによって、新しい道が拓かれるための犠牲となったのである。

「模範」なる語が用いられているのはエッセイ「形象と教訓」の冒頭であるが、その引用に続いてまたこうも言われている、「われわれはその形象を同時代に生きるものたちに提示する、この模範を見よ、と」[28]。このエッセイにおいて、マンは自己のアンリ四世観とアンリを作中人物として造形する際の意図を詳細に語っている。だがそれだけではない。

「彼（アンリ…筆者注）は身分の低いものたちを高め、それによって支配階級をそれだけ貶しめた……彼は自分がプリンスであり、民衆であることに自己の権利を見出していた」[57]。

アンリの姿の背後に作者ハインリヒ・マンの姿が浮かび上がって来ないだろうか。先にマンは自己に「労働者」と名乗ることを許していたことを指摘したが、知識人＝労働者マンは、プリンス＝民衆アンリの姿に、自己との同質性を見出し[58]、同時に労働者国民を導くものとしての「模範」的形姿を仮託したのである。

他者のために働こうとした真に偉大な人物アンリは、また当然のことに「自分一人のために働き、民衆をおのれらの汚れた欲望と空虚な狂気の犠牲にする」[56]偽りの偉大なものたちの反対像である。アンリはドイツ国民の「模範」であり、同時にヒトラーの反対像である。アンリは、分裂したフランスを民主国家という遙かな目的に導く指導者とその実現をもたらすものとしての国民を、一身に兼ね備えさせられた「比喩」で

あった。

だがマンがいまドイツに求めているのが、民主国家[59]の実現であるとすれば、彼がかつて説いた「超国民的なものへの信条告白」はどこへ行ってしまったのか。ナチ国家という強大な独裁国家を目前にして、さしあたりは「民主国家」の実現へと「後退」したのだろうか。それとも亡命はかれの「保守革命」的なイデオロギーをご破算にさせてしまったのか。「マンはアンリの絶対主義を初期社会主義への、あるいはそれどころかボルシェヴィズムへの革命的先取り」として解釈しているという指摘がたしかにある。[60]しかし「全ヨーロッパ世界は、ひとりフランスのみならず、アンリ王の最後の頃にはかれに最高のものを期待した[61]」とマンが言う「最高のもの das Höchste」が具体的には何を指すのかはっきりしないが、そこにマン自身の「超国民的なもの」への期待が重ねられていなかったとも言い切れないだろう。

マンが造形したアンリ四世に「ふさわしいのは人類愛の教会 église humaine において、イエスがみずから創始した神の教会において占めている地位である。即ち選ばれたもの、神の子の、創始者の、メシアの、救世主の地位である[62]」とまで言うつもりはないが、アンリが民衆の解放者であり、同時にそのための犠牲者であったとするハインリヒ・マンの心情は、ヒトラーを「アンチ・クリスト」としてとらえ、支配者を、殊に神聖ローマ帝国皇帝を神によって選ばれた、神の慈愛の代行者と考える[63]多くのキリスト教作家のそれに意外に近かったのではないだろうか。マン自身がそれを自覚していたという証拠は見出しえないが、この点にこそハインリヒ・マンの国内亡命作家たちへの理解と同情は根差していたと思われてならない。

（一九八五年完／一九九三年補）

追記

拙論は元来反ファシズム文学関係のある研究会のために書かれたものである。執筆後相当の時間が経過し、この間には内外で新しい論考が少なからず発表されているが、それらの成果の恩恵に浴する余裕はなく、今となっては不備な点が多々あると思われるが、研究会も解散され、論集発行も見通しがつかないので、ここに敢えて発表することにした。筆者の不勉強がもとで、このような形で成瀬先生、千葉先生の退職を記念すべき論集を汚すことになったについて、両先生のご寛恕を乞う次第です。

略記一覧

1 HM: Heinrich Mann

2 VdK: Heinrich Mann, Verteidigung der Kultur, Claassen, 1960.

3 Paris 35: Paris 1935. Erster Internationaler Schriftstellerkongreß zur Verteidigung der Kultur. Reden und Dokumente. Mit Materialien der Londoner Schriftstellerkonferenz 1936. Akademie-Vlg., Berlin, 1982.

4 Arnold: Deutsche Literatur im Exil 1933–1945. Bd I; Dokumente, Bd. II; Materialien. Hrsg. v. H. L. Arnold, Athenäum Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt/M., 1974.

5 ZA.: Heinrich Mann, Ein Zeitalter wird besichtigt. Rowohlt Taschenbuch Vlg. Reinbeck bei Hamburg 1976.

〔注〕

(1) Gisela Berglung, „Einige Anmerkungen zum Begriff der Inneren Emigration". Stockholmer

Koordinationsstelle der Erforschung der deutschsprachigen Exil-Literatur. Stockholms Universität Deutsches Institut 1974. これは後に „Der Kampf um den Leser im Dritten Reich" Georg Heintz, Worms, 1980 に収録されている。

(2) Fritz Eberhard, Bericht. In: Chr. Klessmann u. F. Pingel (Hr.), Gegner des Nationalsozialismus. S. 202. Eberhard は一八九六年ドレースデン生まれ、本来の名前は Hellmut von Rauschenplat。戦前はヘッセン州の教護施設の教師、一二六年以後 Internationaler Sozialistischer Kampfbund の会員。三三年逮捕命令が出た際に現在の名に変えた。三七年末までドイツ国内に留まり、三八―四五年ロンドンに亡命。四五年帰国後は SPD の州議会議員などを務めた。

(3) この件については、亡命文学に関する文献では多かれ少なかれ触れられているが、ここではさしあたりマンに関しての次のものを挙げておく。そこにはマンが亡命中に書いた闘争文などは約三〇〇点に達すること、それらのうちの少なからぬものが切手販売用や粉末レモナーデ販売用のありふれたセロファンの袋、ティーバッグ、写真付属品の包装、種子の袋などに入れられ、あるいは旅行案内書に偽装されて配布されたこと。それらのパンフレット類をマンが《Dünndruck-Manifeste》と呼んだことなどが紹介されてる。Werner Herden, Streitschriften im Tarngewand. Zur antifaschistischen Publizistik Heinrich Manns. In: Marginalien (1972) H. 45.

(4) Jan Petersen, In: Paris 1935. S. 298f. また、小松清編訳『文化の擁護』第一書房、昭和一〇（一九三五）年。更に、Jan Petersen, Unsere Straße. Eine Chronik. Geschrieben im Herzen des faschistischen Deutschlands. Pahl-Rugenstein, Köln, 1983. 邦訳は長尾正良『われらの街。ファシズム・ドイツの心臓部にて』新日本出版社、一九六四年、一八二頁。

(5) ハインリヒ・マンは国内での活動には亡命したものたちからの情報が不可欠であることを指摘しながら、同時に「国内の体験がわれわれに働きかけて来る」とも言い、また実際国内での活動の報告が届

いたことにも言及されている（VdK. 264ff.）。またマンは「第三帝国内で禁止され、焼かれ、検閲にかけられ、沈黙させられた著作や書物のすべてを蒐集し、ヒトラーファシズムの研究に資する」目的でパリに設立されたDie Deutsche Freiheitsbibliothekの創立時（一九三四年五月一〇日）の会長を務めていたから、当然国内の事情にはかなり通じていたと推測できよう。なおこの蔵書は四〇年にパリがドイツ軍に占領された際にゲシュタポによって押収され、廃棄されたという（A. Kantorowicz, Deutsche Tagebuch, S. 70. zit. in ; Jean-Michel Palmier, Weimar en Exil, Tome 1. Payot / Paris, 1988. この件については有田英也氏のご教示をうけた）。

（6）VdK. S. 94f.

（7）Hermann Kesten, Die Literatur und das Dritte Reich. In ; Der Geist der Unruhe. Literarische Streifzüge. Deutscher Bücherbund New York 1959. S. 44f. Erste Veröffentlichung, in ; "Sammlung" Amsterdam 1934.

（8）「国内の戦士たちには、われわれが彼らとともにあり、来るべき日のことを考慮に入れていることを知ってもらいたい」（VdK. S. 202）という呼び掛けには、マンの国内との連帯の期待が表されている。しかし彼の発言は、ただ単純に国内を意識してのことではなかった。社会主義者やキリスト者が相違点ばかりに気をとられず、「双方の相似点を重要視すること」（VdK. S. 205）を要求し、更に国外の人民戦線に参加している労働者と信仰者に共通しているのは「最高のもの」であり、かれらが望んでいるのは「自由」である（VdK. S. 243）というマンの言葉は、国外における統一をなかなか実現できないでいる諸勢力、諸党派にも向けられたものではなかったか。

（9）HM : Aufgaben der Emigration. In ; Arnold. Bd. II. S. 8. なお筆者にとって興味深いのは、W. Herdenによれば（Wege zur Volksfront. S. 26）このエッセイは後にDie Schule der Emigrationと題されて発表されたもの（筆者未見）からの抜粋と言えるものらしい（ただしJürgen Haupt,

Heinrich Mann. Sammlung Metzler Bd. 189, 1980. S. 154 ではただ新版 Neudruck とあるだけである）ことである。ハインリヒ・マンが亡命を「学習」の機会と考えていたことをうかがわせる一つの証左のように思えるからである。

(10) たとえば Reinhold Schneider は、「私は私の国民と共にあってのみ生きることができる。私はその道を一歩一歩共に歩みたいし、またそうしなければならない。私が自らの信じるところによって亡命した人々をいくら高く敬うにせよ、私は一度たりともドイツを離れようと考えたことはなかった」と言っている。Verhüllter Tag, J. Hegner Köln u. Olten 1954 98ff.

(11) プロイセン芸術アカデミーの改組については、Hildegard Brenner, Ende einer bürgerlichen Kunst-Institution. Die politische Forderung der Preußischen Akademie der Künste ab 1933. Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart, 1972. に詳しい。

(12) VdK. 441f.

(13) ハンス＝アルバート・ヴァルターは『フランス亡命期のハインリヒ・マン』において、当時の政治状況の中でのマンの位置と役割、彼の『アンリ四世』を中心とする創作・文筆活動の意味、それらとマン自身の思想・心情との関わりの変遷を跡づけ、「亡命はインテリ民主主義者から革命的社会主義者を生み出した」と言っている。Hans＝Albert Walter, Heinrich Mann im Französischen Exil. In; Arnold Bd. II. 214ff. マンは一九三二年に発表した「超国民的なものへの信条告白」（HM, „Das Bekenntnis zum Übernationalen", in; Essays. Claassen Hamburg 1960. 邦訳は小栗浩訳『歴史と文学』晶文社、一九七一年に収録）の中で、フランスの歴史家マルク・ブロックの言葉を援用しながら、「すぐれた人々（gute Köpfe）」がドイツとフランスの一致を、即ち超国民的なものへの統一を両国民に「おしつけ（aufnötigen）」なければ、「両国のプロレタリアートがいずれは独自のやり方でそれをやってのけるであろう」と言っている。マンの現在の、とはつまりパリ亡命後の労働者への期待は、

「すぐれた人々」によって彼の期待する「超国民的なもの」への信条告白がなされず（彼はまた「少なくとも何人かのものが先立って信条を告白する必要がある」とも言っているが、その「何人かのもの」が「すぐれた人々」であるのは明白である）、それへ向かっての行動もおこされなかったことによって、彼の心ならずもの予測が、期待へと転化されたものに過ぎないのではないか。そして労働者を「やってのける」ように導くものの役割は、依然として「すぐれた人々＝知識人」の役割としてマンの内で温存されている。その導き手の「模範」としてやがてアンリ四世が造形されるのだろう。

(14) HM. Verteidigung der Kultur. In ; Paris 1935 S. 291. また VdK. 132ff.

(15) VdK. S. 255. たとえば「キリスト者たちは聖職者がナチの攻撃に対する答えを読み上げるのを聴く。……司祭がその叙品［司祭の資格を与えられること…筆者注］より国家に対して柔順であるなら、すべてを告げなければならない」などの言葉は、ナチやゲシュタポに対して忌憚のない批判を加えたミュンスターの司教フォン・ガーレンの発言などが背景にあるかもしれない。

(16) VdK. S. 333.「ドイツの母たちよ、あなたがたの息子が他の母親たちの愛する息子を殺している」。

(17) VdK. 321ff.「これらの価値のないものたちは、自己保身のために知識人の敵になっている。そして君たちは望むと望まぬとにかかわらず知識人なのだ」。

(18) Vdk. S. 341.

(19) マンはかつてプラークの市電の中で席を譲られた時、壮年であり病気でもない自分に何故なのか、という問いに連れの友人が「君が知識人だと思われたからさ」と答えたエピソードを紹介し、その理由は「彼らの大統領――教授で作家でもある解放者マサリク――が勇敢かつ巧妙な行動によって頭脳労働者（Denkender）の力に対する国民の信頼を強めた」からだとマンは言っている。ZA. S. 24.

(20)「わたしは昔から民衆という語を労働する人間と理解して来た、そして自分は言葉による労働者として、その人たちに親近感を覚えて来た。」VdK. S. 144.

(21) 注(19)参照。またVdK. S. 216には、文学の効用について言及されている。

(22) 「人間を指導するために必要な権威を保証するのは精神だけである。(略)知識人たちはこれまでもしばしば政治的行動をして来た。知識人たちは一国の運命を左右して来たし、あらゆる国々の運命に影響を及ぼして来た。」Paris 35. S. 292.

(23) 「知識人とプロレタリアートの共同作業が唯一理性的なものである、というのもプロレタリアートが将来国家を形成する階級であり、文化の担い手であるからだ。われわれはそのうちすでに西方において共同作業を始めている。プロレタリアート化することを恐れている知識人は時代遅れになりつつある。われわれはプロレタリアートを知識人化することを考えよう。(略)より信頼できるは、理性であり、人間の歴史の間には、ただ進歩あるのみということを知ることである。」VdK. S. 472.

(24) 前注参照。

(25) 「すべての働く者が一つになったらどんなに力強いものになるかは、個人の知識にかかっている。(略)しかし高い所にとどまりうるのは絶対に精神的に訓練を受け、道徳的に確固たるものだけである。」VdK. S. 111.

(26) 「一九三三年のドイツ社会のように、一つの社会がそのあらゆる文化、つまり精神的、経済的、政治的文化もろともにあれほど無抵抗に放棄され、拡散させられてしまったことはめったにないことである。(略)しかしその原因はドイツにおいてはすでに何世代も前から野蛮が文化より強固なものになっていたことによる。」VdK. S. 109.

(27) VdK. S. 109.

(28) VdK. S. 468ff.

(29) VdK. S. 516.

(30) ZA. S. 318.

(31) VdK. S. 506. ここではアンリは近代民主主義の先駆 Vorform と呼ばれている。

(32) In ; VdK. S. 331.

(33) HM. Die Jugend des Königs Henri Quatre. Rowohlt Taschenbuch-Vlg. Reinbeck bei Hamburg 1983. S. 228. また小栗浩訳『アンリ四世の青春』晶文社、一九七三年、二七三頁。

(34) 渡辺一夫『フランス・ルネサンスの人々』三三四頁。

(35) ハインリヒ・マンが『アンリ四世』を書くに際して用いた文献などについては、Ekkehard Blattmann, Henri Quatre Salvator. Studien und Quellen zu Heinrich Manns "Henri Quatre" 3 Bde. Universitätsverlag Beckmann Freiburg/Br. (3. Bd. Peter Lang Frankfurt/M.) 1972〜1993 があり、また山口裕「ハインリヒ・マンの歴史小説『アンリ四世』について」がこの作品を多角的に考察している。アンリ自身については、André Castelot, Henri IV. Sieg der Toleranz. Dt. Übersetzung von S. Bally, Casimir Katz Vlg. 1987. 当時の宗教的状況については『宗教戦争』白水社、クセジュ文庫。

(36) HM. Die Vollendung des Königs Henri Quatre. Rowohlt Taschenbuch-Vlg. Reinbeck bei Hamburg 1983. S. 37. また小栗浩訳『アンリ四世の完成』晶文社、一九八九年、六四頁。この訳語は小栗訳による。

(37) 渡辺一夫　前掲書　三二六頁。

(38) 渡辺一夫　前掲書　三二五頁。

(39) HM. Die Jugend. S. 226.

(40) a. a. O. S. 225.

(41) a. a. O. S. 223.

(42) a. a. O. S. 228.

(43) HM. Die Vollendung. S. 20. また小栗訳、四一頁。

(44)「彼らがその苦難の時にあって多くを学び身に着けたので、われわれの知見も増加する」あるいはまた「たいていのものは、この政体の地獄で決定的な教育を受けている」など。VdK. S. 230f.

(45) Reinhold Schneider, Allein den Betern. In ; Die Sonette von Leben und Zeit, dem Glauben und der Geschichte. Köln, Jakob Hegner Vlg. 1954.

(46) Reinhold Schneider, Advent 1944 II. A. a. O. S. 142.

(47) Reinhold Schneider, Antichrist. Nach Luca Signorelli. A. a. O. S. 87. また Werner Bergengruen の連作詩集『怒りの日』の中でもヒトラーは、ダンテの筆によって断罪され、ブルータスとユダの仲間に加えられるべき「第三の男」と言われている。W. B, Dies Irae. Verlag der Arche Zürich 1956 S. 13.

(48)「第三帝国の地獄に入れられた作家や司祭の中には、とうの昔に貧しいものの側に属し、彼らとともに闘わねばならぬと確信しているものもいた」。VdK. S. 231f.

(49) たとえばリカルダ・フーフの「詩人」と題された詩の一節には、「詩人はみずから語るのではなく、聖なる意志を告げるために／神が遠く響き渡る声をかれに与える／『わが民を導け』と神は語る、『民がわが掟を離れるなら／それを罰し、それに教え、永遠の星々へ連れもどすがよい！』」とある。Ricarda Huch, Der Dichter. In ; Gesammelte Werke Bd. 5. Köln Kiepenheuer & Witsch, 1971. S. 318.

(50)「考えることを仕事としてきたものたちは、ドイツで多くのことをなおざりにして来た。起りえた災厄のかれらは共犯者であるのだ」VdK. S. 504.

(51) VdK. S. 232, S. 241, S. 262 などを参照。

(52) VdK. S. 353.

(53) VdK. S. 239.

(54) たとえばラインホルト・シュナイダーは、一九四四年七月二〇日事件に触れて、「罪を自らに引き受ける、赦されるかどうか定かではない罪を引き受ける覚悟ほど大きな犠牲はない」とし、「かれ（実行者

…筆者注）はあらゆる殺人者のうちでもっとも義なるものであったという言葉があてはまるだろう」と述べている。In; Verhüllter Tag. S. 187.

(55) VdK. S. 394.

(56) VdK. S. 521.

(57) VdK. S. 518.

(58) E. Blattmann, Henri Quatre Salvator. Bd. 1. S. 101 には「アンリ四世はその作者と区別できないほど融合している」とあり、「いまや私を動かしている思い Gedanken のどれもがかれ（アンリ）にふさわしいものになっている云々」というマンの手紙の一節が紹介されている。また山口氏もアンリが「作者の分身の性格をもたされている」ことを指摘している。山口裕、前掲論文　一七頁。

(59) 「亡命においては人民国家 Volksstaat のために実践的かつ目的意識をもって活動がなされる」（VdK. S. 202）あるいはまた「信仰者と思想家、民主主義者と社会主義者、労働者と知識人がただ一つ呼び求め、闘い取ろうとしているのは、ドイツ――一つの民主国家である」（VdK. S. 206）。

(60) E. Blattmann, a. a. O. S. 104.

(61) VdK. S. 521.

(62) E. Blattmann, a. a. O. S. 104.

(63) W・ベルゲングリューンは連作詩集『永遠の皇帝』（一九三五年から三六年にかけて書かれ、三七年春匿名で刊行された。オーストリア併合後に禁止・押収されたが、手写されひそかに読まれた）の戦後版への「あとがき」で、「帝国」及び「皇帝」について大略次のようなことを述べている。「かつての帝国は帝国主義とは無縁であり、キリスト教とパックス・ロマーナの思想に支えられている。それは国民という概念を持たず、地域にも限定されることなく、人類全体に対する奉仕を目的とした。皇帝は神の委託を受けたものであり、父なる神にならった諸民族の父である。この一連の詩は政治的傾向

詩として受け取られることを意図したものではないが、当時支配的であった歪曲された帝国観にかつての帝国像を対置させようとしたものである」（Werner Bergengruen, Der Ewige Kaiser. 2. Aufl. Mit einem Nachwort des Verfassers. Verlag Schmidt-Denzler/Graz. Ohne Jahresangabe〈1950?〉）。筆者はこれにマンの次のような陳述を並べてみたい誘惑を押え難い、「私は信じる、私はたしかに知っている。ドイツ人は、ドイツ人こそは、伝承に培われた心の奥底において自分たちの国家をはるかに越え出ているということを。自己の内心の声にもっともよく耳を傾けたからには、かかる国家を捨て去るのにドイツ人こそは最も苦労を要しないであろう。次に来るべき段階は依然としてドイツ的である。そしてこの段階は超国民的なものである」（HM「超国民的なものへの信条告白」小栗浩訳、一〇〇―一〇一頁）。ここでマンが言う「伝承」の意味内容は明確ではないが、カール大帝に象徴される神聖ローマ帝国、即ち「ドイツ民族の神聖なるローマ帝国」を重ねてみることは、あながち牽強付会とばかりは言えないのではなかろうか。